=市史編さん便り=　【23 号】 令和 4 年 7 月 26 日（火）発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

◎『新市史（通史編）』の「第15章動物」における「海洋生物」分野の原稿提出⇒ゲラ刷りへ

先週 22 日（金）午後、高知県立足摺海洋館 新野大館長（市史執筆協力員）にご来庁いただき、依頼原稿を提出していただきました。新野館長には「通史編」における「第 15 章　動物」のうち、「海洋生物」分野をご執筆いただきました。原稿は紙ベースとデジタルデータ（ワードデータ及び魚等のペン画や写真のデータ）の両方でいただくことができました。編集する側としては大変有り難いです。

↑左：新野館長、中：田村、右：市史編さん室吉本

新野館長には、昨年度末、急遽原稿を依頼したにもかかわらず、夏休み中のご多忙の中をわざわざご持参いただき、しかもお心遣いいただき早めに提出していただきました。あらためて感謝申し上げます。

説明文も初心者でも分かりやすい内容となっており、土佐清水市の沖合いに生息する様々な魚類をはじめとする海洋生物について解説していただきました。

特に、新野館長が自筆で長年集積してきた精緻なペン画や魚類等の写真は一見の価値があり、まるで図鑑を見ているかのような錯覚に陥ります。楽しみにしていてください。また、「広報とさしみず 9 月号」の市史編さんコーナーでも、館長の執筆の一部をご紹介させていただく予定です。ご期待ください。

郷土学習資料（５）－鼻前廻船商人たちの動向（その３）最終回－

市史編さん室　田村　公利

(5) 鼻前（足摺半島南西部一帯）以外の地域における袋屋の痕跡

袋屋先祖書「酒甫手根居（さかうらてこんきょ）」によると、袋屋は天和年間（1681～84）

に窪津と下茅（現下ノ加江）の分家に酒屋株が譲渡され、暖簾分けされた。
　下ノ加江は、天正十七年（1589）、「下萱之村地検帳（下ノ加江下浦一帯の地検帳）」では、屋敷 25 軒、水主 16 人、漁夫 1 人が記載され、ほとんどが水主と漁夫の給地であった。中世以前から漁業により生計を立てていたことが分かる。近世は、天和三年（1683）『浦々水主船数定書』に、水主 99 人、廻船 14 隻、漁船 11 隻とあり、中世と同じく漁業で生計を立てている。加えて、水主の増加と廻船の数から見て、下ノ加江川河口部に開かれた川湊において、三原地区で産出された木材や木炭を集積し、海上輸送していた。『浦々水主船数定書』に記載された廻船 14 隻の中に、下茅浦袋屋の廻船も恐らくは含まれていたに違いない。

　近世中頃に発生した「宝永地震（1707）」により、市域の浦々は、その多くが亡所（壊滅状態）となった。下茅浦も例外ではなく、津波が河道を遡り、支流・市野瀬川を逆流し、市野々の奥に所在していた「チシャノ木」まで達したと記録されている（『南路志』）。「チシャノ木」が現在のどの辺りに位置するかは不明であるが、字切図から判断して市野々と市野瀬の中間地点である「沢」付近にまで逆流したのではないだろうか。河口部からの直線距離にして 4 キロメートルほど川を津波がさかのぼったことになる。恐らくその流域は、壊滅的被害を受けた可能性が高い。

　宝永七年（1710）、同浦の船数は廻船 3 隻、市艇船 2 隻、漁船 21 隻の計 26 隻となった（『下浦々縮書』）。「宝永地震（1707）」前の天和三年（1683）に 14 隻あった廻船が、僅か 3 隻に減少していることは、廻船業自体に壊滅的被害が生じ、商業を営む者が減少したためであろう。この時期、下茅浦袋屋が存在し、商業活動を営んでいたかどうかは、残存する史料もなく不明である。

　下茅浦・光明寺過去帳には、宝永年間から寛政年間にかけて、紺屋・田丸屋・橋子屋・玉屋・播磨屋・讃岐屋・丸市屋・桝屋・泉屋の屋号は確認されるが、袋屋は登場しない。これらの商人は、カツオ節加工販売を生業とする海産物関連の廻船商人と思われる。下茅で本格的に節加工が開始されるのは、鼻前地域（足摺半島西南部の伊佐・松尾・大浜・中浜等の地域）に遅れて 18 世紀に入ってからである。これらのことを総合的に鑑みると、下茅浦の袋屋は、「宝永地震（1707）」の影響で消滅していた可能性が高い。

　窪津袋屋は、史料や石造物等でその痕跡すら見つけだすことができない。今後は、近世墓石を含めた石造物の悉皆調査をしていく必要があり、拙速に結論を急ぐことは避けなければならないが、窪津浦袋屋も下茅浦袋屋同様に「宝永地震（1707）」等で衰退・断絶した可能性が現時点では高いと言わざるを得ない。
　『ＮＴＴ西日本ハローページ』（2009）を見ると、上原姓が分布する地区は、浦尻（32%）・下ノ加江（13%）・中浜（10%）・松尾（10%）・大浜（8%）・窪津（6%）・その他の地区（21%）である。浦尻上原氏は、大浜浦を本拠とした袋屋と直接関係があるかどうかは不明である。その先祖は、幕末期に郷士として清水港口の番所守役を代々任じられていた。この中で上原九郎衛門は、清水象潟に塩浜を造成することを時

の浦奉行谷真塩に提案した人物として知られる。

浦尻地区を景観観察すると、本清水に所在する蓮光寺傘下にあった満願寺跡が所在している。しかしながら、ここは寺院らしき建物も無くなり、小さなお堂が建立されているのみである。近隣に八坂神社の境内が所在している。その石段の落成記念石碑に「區長　上原寅之助」の氏名が刻まれている。清水港口の番役であった郷士上原氏の縁する人物であろう。明治期に入っても郷士上原氏の子孫が地域の有力者として存在していた証拠である。残念なことに、浦尻上原氏と大浜浦を本拠とした袋屋上原氏との関係性を裏付ける史料や痕跡は見当たらない⑯。

(6) 近世石造物から見た山城屋の系譜

山城屋の先祖は、永正七年（1510）に土佐一条氏初代当主一条房家（一条教房次男）に京都仁和寺（真言宗御室派総本山）の尊海が足摺岬金剛福寺住職を要請されて下向した際に、寺侍として同行したと伝えられる⑰。

山城屋の祖先とされる山崎三河守が、山城屋と直接結びつくかどうかは、今後の課題として慎重に検討していく必要があるが、「坂本村々地検帳」天正十七年(1589)10月7日）や「山路之村地検帳」天正十七年(1589)11月5日等の『長宗我部地検帳』では、坂本村、芋生村、具重村、山路之村カツウ子や鈍子ノ川等の金剛福寺荘園において多くの給地を有し、その有力な荘園管理者として位置つけられており、これは土佐一条氏の支配時代から引き継がれた給地であることはおそらく間違いないだろう。その子孫が近世に入り、山内藩政下でかつての実力を評価されて庄屋に配置されたとしても何ら不思議はなく、山城屋と山崎三河守とのつながりが全く根拠の無い話であるとは言い切れない⑱。

土佐清水市立中浜小学校下に所在する山城屋関連墓地の墓石調査から山城屋は、享保二十年（1735）に没した中浜浦庄屋・山﨑仁兵衛やその子・彦左衛門（宝暦十年、1760年没）につながると推測される。山﨑仁兵衛は享保四年（1719）「足摺山金剛福寺奉加帳」に566匁6分を寄進した記録が残っており、松尾浦庄屋・山崎彦丞（607匁4分寄進）、大浜浦庄屋・上原彦三郎（508匁寄進、大浜を本拠として酒屋を経営する本家袋屋当主か）などと共に多額な寄進を行っており、鼻前七浦で群を抜いた財力があったことを示している。また、松尾浦庄屋・山崎彦丞は、松尾海運寺（金剛福寺末寺）に所在する弘法大師像の台座にその名が（円形に記された寄進者の一人として）確認できる。彼は、奉加帳に「紀刕印南浦舟頭」（紀州印南浦船頭）と記載しており、紀州印南浦出身者であることを添え書きしている。

↑中浜小下の山城屋墓所

この彦丞と中浜浦庄屋・山﨑仁兵衛はどんななつながりがあったのだろうか。同じ山﨑姓を名乗り、両方が同時期に隣接する浦の庄屋として鼻前地域で勢力を誇っていることを考えると血縁関係など何らかの関係性があったと見るのが自然であろう。一

方の松尾浦庄屋・彦丞が紀州印南浦出身者であることを考えると、山城屋の家系は、「紀州印南浦」「金剛福寺」という二つのキーワードで結びつけることができる。しかし、現時点においては、山城屋の近世中期以前の家系や紀州印南浦の旅漁海民との関係性について確証を得るには至っていない。

ただし、この墓地に紀州印南浦の角屋一族である角屋（久保田）儀三郎（墓碑では儀三浪と刻まれる）（文化六年没、1809）と角屋（久保田）与左衛門（文政二年没、1819）の二基の墓石が所在している⑲。

角屋儀三郎は、紀州印南浦の海民で日向での旅漁の帰路、土佐国西南部・鼻前沖を発見した人物である角屋甚太郎の子孫であり、松尾・明神浜船引湊を据浦に活躍した角屋与三郎の甥にあたる⑳。また、与三左衛門についてはどのような人物であったか不明であるが、恐らく儀三郎の子、若しくは兄弟などの近親者であった可能性が高い。なぜ山城屋関連墓地に紀州印南浦旅漁海民の頭目である角屋一族の墓石が所在しているのだろうか。角屋と山城屋の関係や松尾浦と中浜浦のつながり等、近世市域で隆盛を極めたカツオ漁業と節加工史は興味が尽きない。『印南町史』（和歌山県）では、儀三郎の墓石が山城屋当主の墓石近くに置かれていることから、山城屋の節加工における技術顧問として厚遇されていた可能性があると推測している。

今ある状況から断定すれば、角屋儀三郎や与三左衛門が山城屋の親族同様の丁重な扱いを受けていること、初代と三代当主が「儀右衛門」を名乗り、「儀三郎」の「儀」の字が共通しており、角屋は山城屋と何らかの関係性があり、客分的な待遇で扱われていたことは間違いないものと思われる㉑。

歴代当主の墓石を辿ると、初代儀右衛門（1726～87）、二代武平（武兵衛）（1769～1832）、三代儀右衛門（1789～1846）、四代武平（武兵衛）（1814～57）、四代武平弟・儀兵衛（1828～1903）と続く。旧『土佐清水市史　上巻』では、五代文次郎（1865～1953）、六代源吉郎（1886～1928）となっている㉒。

初代儀右衛門の妻（1798 年没）は、布村庄屋沖喜三進の娘であり、二代武平（武兵衛）は、三崎大庄屋沖家から養子で婿入りした人物である。この頃から屋号を山城屋とし、商いが本格的になされ、家紋も亀甲鳶から沖家家紋の三扇に変更された。このように土佐国西南部・以南地域の有力庄屋沖家と同域の豪商・山城屋とが深い血縁関係で結ばれている事実は、今後の土佐国西南部における廻船商人の実態を解明していくうえで興味深い。山城屋の全盛期は、三代儀右衛門と四代武平（武兵衛）の時代である。その繁栄を証明する石造物が中浜天満宮と足摺岬金剛福寺境内に残されている。

一つは、中浜・天満宮の境内にある高さ約 2 メートルの一対の花崗岩製の常夜灯である。左右とも同じ銘文で塔身右面に「文政丁亥（1827）9 月吉日」、正面に「奉寄進」、左面に「当浦山城屋儀右エ門」（3 代）とある。塔は部分的に欠落しており、新しい石材を補充しているが銘文が刻まれている部分の石材は何とか現存している。

もう一つは、足摺岬金剛福寺の山門内側にある高さ約 3 メートルほどの一対の立派な花崗岩製の常夜灯である。本堂に向かって左側の塔身右面に「山城屋儀右衛門」（3 代）、正面に「奉献」、左面に「天保七丙申三月吉日」が刻まれ、その台座には「備後国住　棟梁尾道　石大工山根屋　源四郎藤原傳篤」と刻まれている。製作した石工の出身地と氏名である。向かって右側の塔身右面に「天保七丙申（1836）三月吉日」、正

面に「奉献」、左面に「山城屋武兵衛」（4 代）とある。これは恐らく、豊後水道経由で備後国尾道から海路にて土佐国最南端・足摺岬に所在する金剛福寺まで取り寄せたものだろう。現在の伊佐漁港あるいは津呂漁港まで船で運搬したことはほぼ間違いないが、それにしても足摺半島上の海抜 60 メートルに近い海岸段丘面に立地する境内までどのような方法で運搬し、設置したのだろうか。

↑金剛福寺の山城屋親子寄進石灯篭

平成 25 年度（2013）尾道市教育委員会が実施した石造物悉皆調査によると、尾道市域の石造物作製は、文政から安政にかけて盛んであり、天保年間（1830～44）にそのピークがあったことが判明した。山城屋寄進常夜灯は、天保七年（1836）3 月に建立されており、まさに山城屋全盛期と尾道市域の石造物作製のピークと時期を一とする㉓。金剛福寺・山城屋寄進常夜灯の銘文「棟梁尾道　石大工山根屋　源四郎藤原傳篤」は、源四郎をリーダー（棟梁）としてチームを組み、組織的に分業して工房として活動していたと推測される。また、山根屋源四郎傳篤の刻銘石造物は、天明五年（1785）から安政六年（1859）までの 74 年間で 51 点確認されている。恐らく複数の職人により代々名跡が継がれていったものと思われる。その分布は、尾道市域とその周辺が圧倒的に多く。それ以外は、愛媛県内子・徳島県板野・高知県足摺岬（金剛福寺）の 3 か所のみである㉔。

松田（2010）の研究によれば、土佐国では南北朝期以前の石造物の分布は仁淀川以西の地域に多く、特に、土佐清水市域は花崗岩製の石造物が多いことを調査して指摘している㉕。彼は土佐清水市爪白に所在する覚夢寺（阿弥陀堂）の境内のほか、市域の石造物調査を通じて花崗岩製の石造物が多く、それらはピンク色のカリ長石を多量に含み、土佐ではみられない花崗岩の成分から分析して兵庫県の六甲花崗岩（山陽帯の新期花崗岩類）の可能性が高いことを明らかにした。調査した覚夢寺を含む爪白地区は、土佐一条氏の重臣が治めた場所である。

土佐一条氏やその外戚にあたる幡多荘の有力豪族・加久見氏等に関係するとみられる五輪塔等の石造物は、一条氏との関連性から兵庫津から交易によって土佐国西南部にもたらされたのではないかという推測も成り立つ。土佐国東部にこのような特徴を持った花崗岩製の石造物があまりみられない状況から先程述べた瀬戸内海・豊後水道を通じて海路輸送された可能性が高いと思われる。

この点では、近世の石造物も同様の輸送ルートと断定できる。その産出地については、兵庫津、中国地方（尾道や下関）など説の分かれるところではあるが、瀬戸内海・豊後水道を介した海の道は、中世から連綿と存在し、京阪神や中国及び九州方面と盛んに人・物の交流がなされていたとみるべきであろう。

(7) 全盛を誇った中浜浦山城屋の終焉

山城屋の繁栄に陰りが見え始めたのが、4 代武平（武兵衛）が 43 歳（1857）で亡くなって以降である。彼が没することで本家・山城屋の系譜は一時断絶するが、その時代に本家を支えたのは、4 代武平（武兵衛）の弟・山﨑儀兵衛（1828～1903、3 代儀右衛門次男）である。彼は、嘉永四年（1851）2 月 12 日、23 歳のときに本家から分家して山西屋を号した（『萬日記』1851 年、山西屋の財産管理記録）。カツオ節改良に尽力し、幕末から明治末にかけて兄亡き後の本家・山城屋の実質的な経営者であり、本家 5 代目と言っても過言ではない存在であった。また、その後に三代儀右衛門三男・山﨑仁吉（仁衛門）（1829～1902 年）も中新宅の屋号を号することになり分家した㉖。

五代文次郎（1865～1953 年）は、分家・中新宅の出身で養子となって本家を継いだ。彼の代になると本家全盛期の財力に陰りがみえ、財産整理を行い 17 隻あったカツオ船が 1 隻にまで減った。この衰退の状況を中新宅 2 代目山崎弥代治は「先代武兵衛早世の混乱期、可成の財産を蚕食されて既に各所の出張は手放し、廻船業は廃業した」と記している㉗。

5 代・文次郎には、4 男 1 女の 5 人の子どもがいた。彼は 88 歳という当時としては長寿を全うしているが、2 人の息子の早世を体験している。子に先立たれた親の悲しみは心が裂けるような辛さがあったに違いない。彼が 49 歳のとき、次男・亀之助が大正三年（1914）に 19 歳の若さで没し、63 歳のとき、山城屋の後を継いだ長男・6 代源吉郎が昭和三年（1928）に 42 歳で没している。

また、6 代・源吉郎は、先妻との子どもが 2 人、後妻との子どもが 1 人、計 3 人もうけている。先妻との子どもは長男保秀と次男保定である。長男保秀は、源吉郎が逝去したと同じ年（昭和三年）に逝去し、次男保定は翌年相次いで逝去して不幸が続く。残された後妻との子どもである 3 男（保興）は、山城屋を離れ、郷里を後にして北海道の札幌市に居住した。山城屋 6 代・源吉郎の逝去が山城屋の事実上の終焉となった。

註

⑯田村公利「近世土佐国西南部における鼻前廻船商人の足跡 袋屋関連の石造物及び過去帳等から見た一考察」（『西南四国歴史文化論叢よど第 15 号』西南四国歴史文化研究会、2014 年、29～48 頁）

⑰山崎弥代治『江口・山崎両家家系譜』私家版、1974 年。

⑱田村公利「近世土佐国西南部における鼻前廻船商人の実像―紀州海民の動向と山城屋の足跡を通じて―」（『西南四国歴史文化論叢よど第 14 号』西南四国歴史文化研究会、2014 年、29～48 頁）

⑲中山　進「五　以南漁民史」（『土佐清水市　上巻』土佐清水市、1980 年、753～1025 頁）

⑳明和九年（1772）、角屋甚三郎（角屋長男）は船団を率いて土佐に移住し鼻前浦々でのカツオ漁で活躍、その後を継いだのは、弟・定吉（角屋二男）の子・儀三郎（当時 14 歳）であった。その儀三郎が幼かったので後見人として土佐へ赴いたのが、叔父の与三郎（角屋三男）であり、彼は松尾・明神浜に石畳を敷いた船引湊を整備し、臼碆沖漁場（鼻前沖漁場の一つ）でカツオ船 12 艘を指揮して操業し、湊近くに納屋を設けて節加工を行った。与三郎は死後、松尾浦の丘陵地に埋葬さ

れた。甥の儀三郎は、松尾浦・清吉にその墓守を依頼し、永代墓守料として田畑一反 11 代 4 歩を提供することを約束した。その証文（契約書）は、「永代預申手形之事」として和歌山県印南町の角屋の流れをくむ久保田家に保管されている。与三郎の位牌は、松尾浦での与三郎の据浦宿・久武家の子孫に伝わり、現在も永代供養が続けられている。また、墓石は、地元の人々に「旦那さんの墓」と呼ばれて大切に供養され、豊漁を招く神として祀られている。

㉑⑲に同じ。

㉒⑲に同じ。

㉓田村公利「近世末・尾道石工集団の活躍」（『西南四国歴史文化論叢よど第 17 号』西南四国歴史文化研究会、2016 年、35～40 頁）

㉔㉓に同じ。

㉕松田朝由「中世土佐における石造物の特徴と展開」（市村高男編『中世土佐の世界と一条氏』高志書院、163～190 頁）

㉖⑱に同じ。

㉗⑱に同じ。

【編集後記】

いよいよ学生さんたちにとって待望の夏休みがやってきました。とはいえ、コロナ第 7 波は暑さに関係なく、私たちに迫ってきます。せっかくの夏休みも思い切って活動ができないというのが実情です。また、暑さも尋常ではなく、世界的にはスペインやフランスでは 40℃を超える日が続いていると聞きます。

市史の編さん委員・編集委員各位におかれましては、こうした厳しい環境ではありますが、委託業者である「ぎょうせい四国支社」の職員さんも含めて、市史執筆という未来を継ぐ、大切な大切な仕事をしていただいております。どうか健康には十分留意され、コツコツと、一歩一歩、慌てずされど休まず、進んでいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

現在、『新市史』資料編の市域の『長宗我部地検帳』の一次資料である文書データを高知城歴史博物館から許可を得て閲覧させていただきました。これを県立図書館が発行した土佐清水市域の各『長宗我部地検帳』と照合し、各村別にエクセルで地権者や耕作者、土地の面積、状態等を整理し、表にしてまとめます。

この作業を市史編集委員会・東近伸副委員長と市史調査協力員兼執筆協力員の山下晃弘氏に精力的に実施していただいております。従来の活字でまとめられた各『長宗我部地検帳』は、所々誤記があり、これを高知城歴史博物館から情報提供していただいた一次資料と照合しながら一つ一つ確かめています。気の遠くなるような作業を地道に取り組んでいただき、お二人には頭が下がる思いです。

来月 29 日（月）には、市史編さん室田村が高知市役所鷹匠庁舎 2 階の市民サポートセンターまで出張し、高知県学校資料を考える会の代表メンバー（目良代表・髙木事務局長・楠瀬氏等）と市史資料編に執筆する学校資料のことについて協議させていただきます。資料編執筆も大きく始動しています。実り多き収穫の秋を迎えるため、この夏を全力で、走りきりたいと決意しています。よろしくお願いします。（田村）